

現代中国語における“V+上+L”構文 ——“上”の終結性をめぐって——

黄 利恵子

0. はじめに——「方向性動詞」

現代中国語において、動詞（以下「V₁」とする）に方向性概念を付与する場合、V₁の後ろに方向性を示す動詞（以下「V₂」とする）を後接するが、それは、日本語における「駆け戻る」「跳び上がる」等の複合動詞に相当する。中国語において、このV₂は一般に方向補語と称され、単純方向補語の“上・下・来・去・进・出・回・过・到・起・开”と、“来・去”が他の単純方向補語と結びついた複合方向補語に分類されている。¹しかし、刘世荣 1954 は、“V₁+上”の“上”を、補語ではなく中心動詞と捉え、修飾語と被修飾語の関係（“向心结构”）にあるとし、また、吕文华 1994 は、単純方向補語の“来・去”及び“来・去”と結合した所謂複合方向補語のみを方向補語としている。吕は、このようにする理由として、刘月华 1983 の見解を援用し、“V+来/去”類が主に方向性を表すのに対して、それ以外の補語が構成する“V+上”類は、主に結果性を表し、かつ、方向性を表す“跑上”（駆け上がる）等も、同時に結果性を包含しているとしている。

本稿は、方向補語の定義を目的とするものではないので、これ以上論及しないが、「前項動詞V₁に方向性概念を付与する」という、この形式が有する共通の統語的意味の上から、以下「方向性動詞」（V₂）とする。

1. “V+上+L”の“上”

方向性動詞の中で、とりわけ“上”と“下”は、空間名詞（方位詞）でもあり、顕著な方向性を有している。他の方向性動詞の場合、主体の立脚点や客体の立地点等の個別の基準点によって、その方向性が相対的に定まるのに対して、“上・下”は、重力を基準にした絶対的方向性を有している。

即ち、“上”は、基本的に「低位置から高位置への移動」を、そして“下”

は逆に「高位置から低位置への移動」を表す。日本語では、同様の方向性を「駆け上がる」「持ち上げる」「跳び下りる」「滑り落ちる」のように、「V₁+上げる/上がる」或は「V₁+下りる/落ちる」等で表現する。しかし、結びつく動詞や、文中に共起する場所目的語（以下「L」とする）と方向性動詞との関係は、日本語と中国語において同一ではない。²

相原 1997 は、“上”の「方向補語」としての意味（派生義を含む）を、以下のように記述している。

- ① 低位置から高位置へ移動する。
- ② 接近する。
- ③ 開いた状態から閉じた状態に向かう。
- ④ ある物がある場所に存在させる。
- ⑤ 到達しにくい目標に到達する。一定の数量に達する。
- ⑥ 動作が開始してさらに継続する。

この中で、①が基本的にLと共起するが、②、④、⑤の意味を表す場合にも、一部Lとの共起が見られる。

本稿は、基本的な①の意味を表す“V₁+上+L”構文において、“上”が表す意味と統語的機能を、Lに付加される方位詞の観点と別の方向性動詞が構成する“V₁+V₂+L”構文との比較によって、明らかにすることを目的とする。さらに、その中で“上”が終結性 (telicity) を有するのかどうかについても検証する。また、本稿で取り上げるV₁は、位置変化は移動形態を表す動詞が中心となるが、非移動動詞もV₁となることができる。V₁の意味素性による“上”の詳細な意味分析は別稿に譲る。

2. 方向性動詞が指し示す場所 (L) —— 「起点」「経過点」「着点」

方向性を伴う出来事、即ち、モノの移動は、「起点」「経過点」「着点」という地点が関与する。しかし、日本語の複合動詞が、たとえば「屋根から跳び降りる」「階段を駆け降りる」「地面に跳び降りる」というように、「起点」「経過点」「着点」の全てと共起するのに対し、中国語の“V₁+V₂+L”構文で、低位置への移動を表そうとすると、共起できる地点は限定される。以下、方向性動詞と共起するLが、如何なる地点を指し示すものであるかについて見ていく。

方向性動詞の中で、“起・来・去”はLと共起することができない。³中でも“起”は、基準となるべき「起点」「経過点」「着点」の何れとも無関係である。言いかえれば、「下から上への移動」を表す“起”も、“上”と同様に、重力による絶対的方向性を有していると言うことができる。また、“来・去”は、話者または文中の施主、或はトピックとして提示された場所等が立脚点となる。⁴“来”は、その立脚点の方向に、“去”は、その立脚点から離れる方向に、それぞれ移動の方向性が定まっているため、“来・去”に地点概念も内包されているとみることができる。

この“起・来・去”以外の方向性動詞は、“ V_1+V_2+L ”構文を構成する。“出・开・下”は、基本的に「起点」を示し、モノがその地点から離れることを表す。

- (1) 他刚才跑出教室。(彼は先ほど教室を走り出た。)
- (2) 他已经离开大学。(彼は既に大学を離れた。)
- (3) 他忽地跳下舞台。(彼は急に舞台から飛び降りた。)

しかし、“出”については、以下の表現例から「経過点」を表すとする見解もある。

- (4) 何教授被几个勇士推出楼门。(苏)
(何教授は幾人かの勇ましい男達に建物の外に押し出された。)

しかし、この“楼门”は“楼”をメトニミー的に示しているだけであり、単に「起点」を表しているにすぎない。したがって、“家门”“屋门”(玄関・入口)等も、Lとなることができるが、表現例(5)のように、“窗户”のような通常出入り口とは見なされないLの場合には非文となる。

- (5) *他已经逃出窗户了。(彼は既に窓から逃げ出した。)

さらに“下”が「着点」を示すという見解もみられる。

- (6) 他顾不上脱衣服,扑通跳下水,向着船游去。(赵)
(彼は服を脱ぐことなどかまわず、バシッと水に飛び込み、船に向かって泳いでいった。)

しかし、それは表現例(6)のように「着点」が“水”の場合だけに限られる。

中国語で「水に入る」ことを“下水”と表現するが、水面下に入る意味を内包しているために、“他跳下水。”が成立すると考えられる。したがって、厳密な意味で“着点”を表しているとは言えず、“水”の性質による特定表現と捉えることができる。このことから、“下”と共に起する地点は「起点」であると言うことができる。⁵

とは言え、“下”の表す意味を、[高位置の「起点」から低位置に向かう移動]と規定するだけでは不十分である。

(7) 他跳下楼。 (彼はビルから飛び降りた。)

(8) *他跑下楼。 (?彼はビルから駆け降りた。)

表現例(7)は、V₁“跳”の動作により、施主が「起点」の“楼”から離れているが、表現例(8)は、低位置に向かって“跑”という移動動作が行われても、施主はそのまま“楼”に存在するため、“楼”は「起点」とはならず非文となる。“V₁+V₂+L”構文において、“下”と共に起する地点は、まさしくその地点から離れる「起点」でなければならないのである。

また、「着点」を示す方向性動詞には、“进・回・到”がある。

(9) 一滴一滴的水流进了这垂危病人的口中。 (谏)

(水が一滴一滴とこの危篤の病人の口の中に流れて入っていった。)

(10) 老王跑回厨房,拿了菜刀来。 (梁)

(王さんは台所に駆け戻り、包丁を手にとった。)

(11) 我帮她提着小旅行袋,来到长安街上。 (谏)

(私は、彼女のために旅行かばんを提げ、長安街にやって来た。)

この中の“到”は、上下移動、水平移動のいずれをも表すことができるが、高位置への移動を表す場合は、“上”と置き換えの可能な場合が多い。この場合、“上”と“到”で、どのような相違があるのか、また、“上”は「着点」を表し、結果性・終結性を有するとされてきたが、果たしてそうであるのかについて、4節で詳述する。

さらに中西1989は、“近”と“满”をも方向性動詞としているが、“满”は方向性を有しておらず、本稿では、“满”は方向性動詞に含めない。しかし、“近”は、表現例(12)のとおり、「前項動詞に方向性を付与する」という方向性動詞としての統語的意味を有しているともみることができる。

(12) 他走近了窗户。(彼は窓に近寄った。)

“近”は、“窗户”への接近を表し、厳密な意味での「着点」ではなく、「方向」を表している。

また、“过”は、表現例(13)のように移動の「経過点」を示す。

(13) 他把手伸过桌子,和我握手。(杨)

(彼は机を越えて手を伸ばし、私と握手した。)

3. 場所目的語(L)の方位詞の必要性

名詞に対する方位詞付加の必要性の有無については、黄 2002 においても言及したが、その名詞が固有名詞であるのか、普通名詞であるのか、或は場所名詞であるのかによって、さらにまた名詞の音節数によっても異なる。基本的に、普通名詞には方位詞を付加する必要があるが、その場合でも、“V₁+V₂+L”構文においては、その方向性動詞の性質によって、共起するLに対する方位詞付加の必要性が異なる。ここで言う方向性動詞の性質とは、地点と方向性との関係であり、前節で述べた「起点」「経過点」「着点」の何れと意味的に結びついているかということである。

「起点」を示す方向性動詞“下・开・出”には、以下のような表現例がある。

(7) 他跳下楼。(彼はビルから飛び降りた。)

(14) 他走开舞台。(彼は舞台を離れた。)

(15) 鱼跳出池塘。(魚が水槽から跳び出した。)

(7) (14) (15) から明らかなように、「起点」の場合は、方位詞を必要としない。

「経過点」をさし示す“过”も、表現例(16)のように、方位詞を必要としない。

(16) 他穿过舞台。(彼は舞台を通った。)

さらに、「方向」を示す“近”は、表現例(12)“他走近了窗户”のように、基本的に方位詞を必要としない。但し、たとえば“河边”“楼前”等広

大で場所の限定があいまいな空間名詞には、以下(17)(18)のように、方位詞が付加される。それは方向性動詞“开”も同様である。

(17) 他跑近楼前了。(彼はビルの前に近寄った。)

(18) 他跑开河边。(彼は川辺を離れた。)

しかし、「着点」を表す“回・到・进”は、以下の表現例の通り、方位詞が必要である。

(19) 他跑回床上。(彼はベッドに駆け戻った。)

(20) 他走到房间里。(彼は歩いて部屋まで行った。)

(21) 他把鱼放进池塘里。(彼は魚を水槽に放し入れた。)

このことは存在動詞“在”の場合も同様である。

(22) 他坐在椅子上。(彼は椅子に座っている。)

表現例(22)は、“在”が存在場所を示し、「彼は椅子に座っている。」という状態を表す場合と、“在”が移動の「着点」を示し、「彼は椅子に座った。」という移動動作を表す場合がある。この「着点」或は「存在点」を表す場合も方位詞は不可欠である。

「着点」を示す“进”は、「経過点」とも共起するが、その場合は、表現例(23)の通り、方位詞を必要としない。

(23) 他跑进窗户了。(彼は窓から駆け込んだ。)

4. “上”の特殊性

第2節・第3節の分析をまとめると、以下のようになる。

- ① “来・去・起”は、Lと共起しない
- ② “下・开・出”は、Lが「起点」であり、モノがLから離れる。
方位詞は不用である。
- ③ “过”と“进”(一部)は、Lが「経過点」である。
方位詞は不用である。
- ④ “近”は、Lが「方向」であり、モノとLは未だ離れている。
方位詞は不用である。

- ⑤ “回・到・进”は、Lが「着点」であり、モノとLが接触する。
方位詞が必用である。

以上から明らかなように、Lが「着点」「存在点」を表し、モノの接触を伴う場合に限って、方位詞が必要となる。

2節で述べた“跳水”の“水”が「着点」であるかどうかについては、方位詞を付加した“*他跳下水里。”が非文となることから“水”は「着点」ではないことが窺がえる。

ここで、方向性動詞“上”と共起するLが「着点」であり、“V₁+V₂+L”構文のLが「着点」の場合に限って、方位詞が必要であるとするならば、方位詞の付加が必要であることとなる。しかし、次の表現例は、方位詞を必要とはしない。

(24) 他跳上椅子了。(彼は椅子に跳び上がった。)

(25) 他爬上山了。(彼は山に登った。)

以上のことから、[“上”と共起するLは「着点」ではない]という仮説を立てることができる。次節では、この仮説を検証していく。

5. “V₁+上+L”と“V₁+到+L”

表現例(24)(25)の方向性動詞“上”を、「着点」と共起する“到”に置き換えると非文となり、方位詞の付加が不可欠である。

(24') *他跳到椅子了。(24") 他跳到椅子上了。

(25') *他爬到山了。(25") 他爬到山上了。

この場合、“上”と“到”は、基本的意味において差はないものの、方位詞の付加については対立する。

このことは、「方向」を指し示す“近”を“到”に置き換えた場合も同様である。

(26) 他跑近了窗户。(彼は窓に駆け寄った。)

(27) 他跑近了墙壁。(彼は壁に駆け寄った。)

(28) 他跑近了一棵大树。(彼は一本の大木に駆け寄った。)

(26´) 他跑到了窗户边儿。

(27´) 他跑到了墙前。

(28´) 他跑到了一棵大树底下。

“近”は「着点」ではなく「方向」と共起するが、“上”と共起するLが、「着点」を指向していないことは明らかである。この「着点」指向について、矢澤・安部（2000）に、日本語におけるヘト格に関する次の記述が見られる。⁷

二つの特徴—動作の進行・展開を表すアスペクト的な表現と相性が良く、「行く」等の進展性を伴わない着点指向の動詞との共起に制限がみられること—は、ヘト格が移動・動きの進行・進展性を有することを示すものと考えられる。

これはヘト格は、たとえば「・・・へと進み始めた。」のようなアスペクト的な表現が多く、「*・・・へと着いた。」というような「着点」指向動詞とは共起しにくいという指摘である。以下、中国語の“上”について、この観点を導入し、分析していく。

(29) 他跑上斜坡了。（彼は坂道を駆け上った。）

表現例（29）におけるLの「坂道」は、移動の経路であり、そもそも「着点」とはなり得ない。“上”と共起するLは、（24）の「椅子」のような「目的地」の場合と、（29）の「坂道」のような「経路」の場合がある。しかも、その時“上”の統語的振るまいに差異はない。しかし、日本語において、「経路」の場合は「坂を上る」のようにヲ格によって導かれ、「目的地」の場合は、「二階に上る」のようにニ格によって導かれる。

さらに、この空間辞「を」は、「バスを降りる」（Cf.「バスから降りる」）のように「起点」を表す場合や、「公園を散歩する」（Cf.「公園で散歩する」）のように「動作が行われる場所」を表す場合もある。この移動動詞と共起し空間辞として振舞う助詞「を」について、中右（1997）は、「地点」（「起点」「経路」等）が問題なのではなくて、「動作が作用する対象」として取りたてる機能を有していると述べている。⁸

“V+上+L”構文のLは、「目的地」と同時に「経路」の場合もあり、かつ「着点」に必要な方位詞が付加されない。このことから、Lを「着点」（「地点」）ではなく、中右の指摘のように「動作が作用する対象」として捉える

のが妥当ではないかと思われる。以下、これについて見ていく。

以下のような表現例において、“上”と“到”は置き換えることができない。

(30) 我们应该继续爬山。不能爬到山上,就没有地方睡。

(私達は続けて上らなくてははいけない。もし山頂にたどり着かなければ、寝る場所はないのだから。)

(31) 我爬过很多山。这次我爬上那座山,以后不会爬的。

(私は多くの山を上ってきたが、今回あの山に上ったら今後はもう上ることはない。)

表現例(30)は、「地点」としての「山上」を取りたてた表現であり、表現例(31)は、当然「山上」に達する意味を内包しているものの、その「地点」は重要ではなく、対象化された山そのものに焦点が置かれている。したがって、いずれの表現例も、“上”と“到”を置き換えると不自然な表現となる。

以上から、“V+上+L”構文は、“V+到+L”構文のように、移動の「地点」に焦点が置かれているのではないことが明らかとなる。そして、“V+上+L”構文における“上”と共起する名詞的成分は、「上向きの移動動作が作用する対象物」とであるとみることができる。

6. 進行相と結果相

“上”と“到”の表現を進行相にすると、以下ようになる。

(32) 他正在跑上斜坡。(彼は今坂道を駆け上っている。)

(33) *他正在跑到斜坡上。

“正在”を用いて動作の進行相を表そうとすると、方向性動詞“上”を用いた表現例(32)の場合は成立するが、(33)のように、「着点」を指し示す“到”に置き換えると非文となる。

“V+上+L”構文における“上”は、(32)のように経路と共起する場合と、次の(34)のように目的地と共起する場合の両者とも、進行相を表すことができる。

(34) 他正在把病人扶上床。(彼は今病人をベッドに抱え上げている。)

(35) 他跑上三楼了。(彼は三階に駆け上った。)

表現例(35)においては、“上”が「着点」をさし示しているように見えるが、進行相と共起できることから、“上”そのものが「着点」を示していない。つまり、表現例(35)は、文末のAspect助詞“了”によって、「駆け上る」という動作の結果相が表されているのであって、“上”自体に終結性(telicity)は包含されてはいない。それに対して“到”は、終結性を内包していることによって、進行相と共起できないのである。このことは、次の表現例からも窺がえる。

(36) 他正在爬上山, 还没到山上。

(彼は山に登っているところで、まだ山頂に着いていない。)

(37) は、“从～V到～”という「起点」と「着点」を明確に表す表現である。

(37) 他从椅子上跳到桌子上了。(彼は椅子から机の上に跳び乗った)

(37´) ?他从椅子上跳上桌子了。

したがって、“到”を“上”に置き換えた(37´)は、不自然な表現となる。このことから“V+上+L”構文は、“V+到+L”構文のように、移動の「地点」を焦点化していないことが明らかである。

7. 結び

“V+上+L”構文における“上”は、「低位置から高位置への移動」という方向性を前項動詞に付与するが、「目的地」と「経路」の両者と共起することができ、しかもその名詞的成分に「着点」を表す場合に必要な方位詞は付加されない。また、いずれの場合にも進行相と共起することができ、“上”は終結性を有していない。以上から、“上”と共起する名詞的成分を「着点」とするには不整合性がある。V+上+L”構文は、移動の「地点」に焦点が置かれるのではなく、即ち「着点」指向ではなく、“上”と共起する名詞的成分は、上向きの移動動作が作用するモノ（「地点」）を対象化し、取りたてる機能を有している。

注

- 1 用語は、『現代中国語文法総覧』1997. くろしお出版 による。また“起”だけは“去”と結びつかない。
- 2 大橋志華 2001. 「動補構文〔動詞+“上”〕に対応する日本語表現について」『日中言語対照研究論集』第3号 日中言語対照研究会 81-98頁 を参照。
- 3 中西 1989. は、“早上七点响,人便弹簧般跳起床。”(出典:陈若曦 1986.《二胡》三联书店香港分店)を引用しているが、筆者によるインフォーマントチェックでは、全員が不成立とした。“起”の後ろには、施事或は、“跳・站・直”等の身体動作の場合に限り、受事である“身・腰・头”等身体名詞が置かれる。
- 4 刘月华他 2001. 547-548頁に詳細な記述がある。
- 5 この他、“*跳下地”等が「着点」を表せるかどうかについてインフォーマントチェックをしてみたが、何れも不可であった。
- 6 刘兰芳・王印权 1981. 《岳飞传》春风文艺出版社 に、“一转身‘扑通’,跳下水里,游向自己的大游船。”という表現が見られるが、筆者によるインフォーマントチェックでは、全員が不成立であった。
- 7 矢澤真人・安部朋世 2000. 「方向のへト格」40頁を参照。
- 8 中右実編 1997. 『日英比較選書⑥ 空間と移動の表現』研究社出版 29-35頁。

用例出典

文中の用例には、出典を略称で記してある。以下に略称と出典を挙げる。

(苏) 苏叔阳 《婚礼集》，(赵) 《赵树理文集(二)》，(谌) 《谌容中篇小说集》，
(梁) 梁斌 《红旗谱》，(杨) 杨沫 《青春之歌》

また、出典を記していないものは、筆者の作例である。

引用文献

- 刘世荣 1954. 〈关于动补结构问题〉《中国语文》
- 刘月华 1983. 《实用现代汉语语法》北京外语教学与研究出版社
- 中西正樹 1989. 「处所宾语与方位词」【中国語学】236, 79-83頁
- 方经民 1993. 论方位参照的构成要素 【中国語学】240, 84-88頁
- 吕文华 1994. 《对外汉语教学语法探索》语文出版社, 158-162頁
- 中右実編 1997. 『日英比較選書⑥ 空間と移動の表現』研究社出版, 29-35頁
- 刘月华 1998. 《趋向补语通释》北京语言文化大学出版社
- 矢澤真人・安部朋世 2000. 「方向のへト格」青木三郎他(2000)【空間表現と文法】くろしお出版, 29-51頁
- 刘月华他 2001. 《实用现代汉语语法》商务印书馆
- 黄利恵子 2002. 「現代中国語“上”が示す空間再考」『言語文化論集』第23巻第2号, 81-92頁